

# 地方の 異彩企業

[総合建設会社]

伊豆倉組／北海道帯広市

## 収益の柱は多自然型工事

多自然型の河川工事に力を入れている伊豆倉組。社員数30人と小規模ながら、自然環境調査を手がける子会社を抱え、環境に配慮した施工計画や設計の変更を発注者に提案する。いまでは売上高の半分以上を多自然型工事が占めている。

サケがそ上する自然豊かな川として知られる十勝川。伊豆倉組の2000年5月期の売上高12億5883万円のうち河川工事が7割を占め、その多くが北海道開発局が発注する十勝川水系の河川工事だ。

同社が得意とするのは、工事前よ

りも自然環境を豊かにする多自然型の工事。北海道開発局から受注した河川工事のほとんどが、こうした多自然型だ。

北海道開発局は1990年、「AGS（アクア・グリーン・ストラテジー）」と名付けた多自然型川づくり

の方針を打ち出した。伊豆倉組はAGS事業を積極的に受注してきた。発注者の仕様通りに施工するだけでなく、設計内容の変更まで提案し、それを認めてもらっている。

例えば、<sup>さつない</sup>札内川の<sup>なかとった</sup>中戸蔦水制工事では、護岸の法線を当初設計よりも河床側に移動させるなどして河畔のハルニレ林や湧水路を残した。

社員数30人の建設会社がこうした提案をできるのは、アークコーポ

### 中戸蔦水制工事

河岸の後退を防ぐ目的で低水護岸と水制を設置する工事。上流付近のハルニレ林を守るために、護岸のラインを当初の設計よりも川側に移動させた。ハルニレ林の中の湧水路が護岸を設けることで本流と遮断されるのを防ぐため、護岸の底に粗い礫を敷いて湧水が本流に流れるようにした。魚や水生昆虫が移動できるように湧水路と本流を結ぶ小さな水路も設けた。水制と水制との間を中州林として残すなどの工夫で、林の伐開を最小限に抑えた。



左：低水護岸のブロックを敷設してから土で覆っている。ブロックの敷設作業は川側から行い、陸部の林の伐開範囲を減らした。右上：完成後2年目の現場の様子。右下：護岸で遮断された湧水路と本流の生態系を連続させるために、護岸端の上流側に素掘りの水路を造っている  
(66ページまでの写真：特記以外は伊豆倉組)

レーション（以下、アーク社）という調査・設計専門の子会社を抱えているからだ。

### 10年近い調査の蓄積が強み

93年に設立したアーク社の社長は伊豆倉組の伊豆倉米郎常務が務める。設計部長は伊豆倉組の和田哲也土木部長が兼務する。そのほかには在籍している10人の社員は、帯広畜産大学を卒業した生物学の専門家が中心。伊豆倉組とは社屋も同じで、「伊豆倉組とは一心同体」（伊豆倉米郎常務）といった関係だ。

アーク社の2000年6月期の売上高は1億6000万円。親会社の伊豆倉組

### 環境に配慮した独自の計画を立案

伊豆倉組が受注した河川工事では、発注者に2通りの施工計画書を提出する。一つは求められた仕様通りに工程や重機などの計画をまとめたもの。もう一つは自然環境に着目し、環境保全上の留意点やそれに対する提案をまとめた独自の計画書だ。

独自の施工計画書を作る際は、まず自然環境を調査する。自然を保全するための留意点を整理し、施工計画に反映させたり設計内容の変更を提案したりする。例えば、仮設道路を植生への影響が少ない位置に設けたり、林の伐開範囲が小さくなるように計画自体を見直したりする。

これらの環境調査や検討は、伊豆倉組がアークコーポレーションに受注金額の1%程度を支払って委託する。アーク社の社員は生態系の専門家が中心なので、生物の立場からいろんな要求をする。それに対して、工事を担当する土木技術者が何が実現可能かを判断しながら、最もいい方法を選んでいく。



右が伊豆倉組常務兼アークコーポレーション社長の伊豆倉米郎氏、左は伊豆倉組土木部長兼アーク社設計部長の和田哲也氏  
(下の写真も本誌)



環境への配慮も加えた独自の施工計画書。環境を保全するための対処法などを具体的に提案する

こうした取り組みは、あくまでも伊豆倉組の自主的な取り組みで、費用も持ち出した。工事終了後の環境の追跡調査も自主的に行っている。

### 下頃辺川護岸工事

下頃辺川に低水護岸を設ける工事。92年から多自然型工法が採用され始め、伊豆倉組は96年まで施工に携わった。96年にはこの工事で北海道開発局の優良工事施工業者表彰を受けた。



97年に施工した箇所。川を蛇行させて中州や浅瀬を造った

### 伊豆倉組が手がけた主な工事

- 92年 下頃辺川護岸工事（～96年まで）
- 97年 中戸蔦水制工事
- 98年 音更築堤工事
- 98年 中島水制工事
- 99年 礼作別上流築堤仕上工事
- 99年 大津上流築堤工事
- 2000年 中戸蔦低水護岸工事

### 礼作別上流築堤仕上工事

礼作別川が合流する十勝川の低水敷で、堤防の盛り土に使う土を採取する工事。跡地を窪地にして水を溜め、湿地ビオトープとした。

音更川に堤防を約200m延長する工事。ここでは地元住民団体と打ち合わせながら施工を進めた。

### 音更築堤工事



水路を切り替える際、「魚の引っ越し大作戦」と銘打ち、住民が参加して魚を移動させた



水を流して造った池。8ha程度の土取り場に九つの池を造った

に経営を依存することなく、単独で約1700万円の経常利益を確保した。

アーク社の仕事の柱の一つは、伊豆倉組が受注した河川工事の環境調査と、伊豆倉組が発注者に設計変更を提案する際の設計業務だ。

もう一方の柱は、伊豆倉組以外から委託される環境調査と検討業務。特に、多自然型の工事が増えたことに伴って北海道開発局からの委託が多い。いまでは仕事全体の7割を占める。アーク社の存在を知った民間の建設会社からの委託もある。伊豆倉組のライバル会社が、環境調査を

依頼するケースも増えてきた。

アーク社の“武器”は、伊豆倉組の仕事を通じて蓄積してきた豊富な環境関連のデータだ。「多自然型の工事では、終了してから自然環境がどう変化するかが重要だ。アーク社はすでに10年近くデータを蓄積してきた。その裏付けがあるから発注者に提案する際に説得力を増す」(伊豆倉米郎常務)。

アーク社は伊豆倉組の一部門のような存在なので、同社の提案には建設会社の視点が備わっている。「環境を保全するために、具体的にどの

ような施工方法を採用すればよいのか示せるのが強みだ」(和田部長)。

### 「大手に負けない特徴を」

伊豆倉組がアーク社を設立して環境に力を入れ始めたのは、92年に北海道開発局から下頃<sup>したころべ</sup>辺川の護岸工事を受注したことがきっかけだ。

北海道開発局が取り組み始めたAGS事業のパイロット工事の一つで、伊豆倉組にとっては多自然型工事を手がける初めての経験だった。

翌年、同社の和田部長がその現場を訪れて驚いた。「完成直後より景観は良くなっているし、鳥や魚、植物の数も従来の矢板護岸の現場に比べて明らかに多かった」(和田部長)。そこで、自然保護に取り組んでいた和田部長の知人に委託して生態系を調べたのが、多自然型工事に本腰を入れる出発点となった。

当時、北海道開発局がAGS事業を増やしていくことは明らかだった。一方で、多自然型に関する環境調査を手がける会社はあまりなかった。「環境調査のデータはいずれ重要になる。他社よりも早くからデータを蓄積しておけば、役に立つ日がくると考えた」(伊豆倉米郎常務)。

ちょうどそのころ先代社長だった父親が他界し、伊豆倉寿信氏が30歳の若さで伊豆倉組の社長を引き継いだばかりだった。「規模が小さいので大手に負けない特徴をもたなくては、いずれ淘汰<sup>とうた</sup>されるという危機感があった。発注者が環境を重視し

### 地元の建設会社と多自然型のNPOを設立

伊豆倉組など十勝地区で河川工事に携わる建設会社6社が集まり、多自然型川づくりに取り組んでいる。98年3月から十勝多自然型工法研究ネットワークとして活動をスタート。2001年6月には十勝多自然ネットと名称を変え、NPO(非営利組織)の認可を受けた。伊豆倉組は事務局を務める。

「発注者が多自然型に取り組むようになり、われわれ建設会社も試行錯誤しながらノウハウを蓄積してきた。みんな

もっと勉強して、行政に積極的に提言したり、地域づくりに貢献したりするのが活動のねらいだ。建設会社のイメージアップにもつなげたい」と理事長を務める西江靖幸・西江建設社長は説明する。

99年2月にはおびひろサケの会などと一緒に、帯広市内を流れる売買川<sup>うりかり</sup>の落差工に鋼製の簡易魚道を設置するボランティア事業を実施。2000年8月には、その上流で川中に木の杭を打ったり石を積んだりして、小さな水制をつくった。



売買川で住民と一緒に簡易魚道を設置している様子(写真:十勝多自然ネット)

始めた時期だったので、当社も環境に投資する決心がついた」と伊豆倉寿信社長は振り返る。

### 大胆な設計変更提案も採用に

伊豆倉組が河川工事を受注するとアーク社が環境調査を行い、伊豆倉組の技術者と協議しながら、環境を保全するための具体策をまとめる。施工者の裁量の範囲で実現できることもあるが、計画の変更を伴うことは発注者に提案して協議する。

はじめは発注者に設計の変更を提案しても受け入れられるケースは少

なかった。好転したのは環境調査を始めて2~3年が過ぎてからだった。「いまでは当初の設計では真っすぐだった川を蛇行させたり、河床幅を広げたりといった大胆な設計変更提案も認められるようになった」（伊豆倉米郎常務）。

現場ではかっとうもある。自然に配慮しながら施工しようとするれば、工程が増えたり作業効率が下がったりすることもある。「いまもアーク社の要求と、徹底した原価管理をたたくき込まれた現場担当者との意見が対立することもある。それでも、伊

豆倉組の社員の意識はかなり向上した。多自然型の現場を担当すると、いいものをつくったという実感がわいて意識が上がる」（和田部長）。

競争入札で受注者が決まる公共工事では、環境へ配慮する企業が受注で有利になるケースは多くない。ただ、公共工事が環境を破壊しているという批判は増える一方だ。「地域に根を下ろした会社が地元の環境改善に貢献し、それが評価されて次の仕事に結びつく社会になってほしい」。伊豆倉寿信社長はこう締めくくった。（斉藤 寿直）

### AGSに取り組む北海道開発局

北海道開発局は90年にAGS（アクア・グリーン・ストラテジー）と名付けた多自然型川づくりの方針を打ち出した。毎年、環境に配慮した工事を集めたAGS事例集を作成したり、工事担当者による発表会を開催したりして、職員勉強や啓蒙に努めている。

「環境に配慮しようという意識が職員にも大分、浸透してきた。最近では建設会社も勉強して自ら提案するように

なってきた。特に十勝地区は自然保護に関心の高い人が多いこともあり、全道の河川の中でも取り組みが進んでいる」と、北海道開発局帯広開発建設部治水課の成田明課長補佐は話す。

河川事業でもできるだけ市民の意見を取り入れようという動きがでている。「環境に対しても市民の要求は多様化している。そのなかでいかに調整を図っていくかが課題だ」（成田補佐）。



伊豆倉寿信社長（写真：本誌）

### 伊豆倉組の概要

- 本社…北海道帯広市東6条南7丁目20
- 設立…1960年9月（創業1939年1月）
- 資本金…2000万円
- 社長…伊豆倉寿信氏（40歳）
- 売上高…12億5883万円（2000年5月期）
- 経常利益…1億6475万円（同上）
- 社員数…29人（うち女性3人、2001年6月現在）
- 資格者数…一級土木施工管理技士=16人、二級土木施工管理技士=5人（2001年6月現在）

- 経営事項審査の総合評点…土木一式=1032点
- 初任給…15万円（2000年4月に入社した高卒社員）
- 休日…日曜日、第2・4土曜日
- 事業内容…完成工事高の約90%以上が土木工事。そのうち河川工事が70%程度を占める。受注先は北海道開発局、北海道、帯広市など。アークコーポレーションと一緒に、2000年2月にISO9001を、2001年3月にはISO14001を取得した。

### アークコーポレーションの概要

- 本社…北海道帯広市東6条南7丁目20
- 設立…1993年8月
- 資本金…1000万円
- 社長…伊豆倉米郎氏（37歳）
- 売上高…1億6000万円（2000年6月期）
- 経常利益…1670万円（同上）
- 社員数…12人（うち2人が兼務、2001年6月現在）
- 資格者数…技術士=2人、測量士=1人、一級土木施工管理技士=1人